金　熙眞
KIM Heejin

もりこむ
アクリル、キャンバス、陶器

もりこむ

　絵の具を混ぜて絵を描くこと クリームを泡立てて食べること粘土を整えて入れ物を作ること
これらは私にとって同じ意味になる。
　キャンバスは粘土になり、クリームは絵具になり釉薬にもなれる。
　経験（感覚）を通じて得た感情（感じ）は私の小宇宙を成す元素になるのではないだろうか。特に味覚は人間の五感覚のうち、消化に繋がり物質に変わる唯一の感覚だろう。私たちが食べることは体内の機関につながる物質的なものだけなのかそれともその当時の雰囲気、一緒にいる人々との時間も含まれて消化されているのではないかと考えてみた。ケーキが載せられているお皿にはただケーキだけが載せていることではなくそれ以外の色々なことが一緒に盛られていることではないかと考えられる。さらに既製品のお皿ではなく、自分で粘土から形を整え焼いて作った入れ物はより根源的な何かを盛り込むことができるだろう。私が描く、あるいは作ったお皿にはどのようなものが盛り込まれることができろのか。絵、料理、陶芸、そしてまた絵。これらを繰り返すうちに絵の具も小麦も粘土も最初は粉 からだということ、パンも陶芸も「焼く」という過程が必要なことなど多くの部分が似ていると気付くことができる。特に円形にかき混ぜる行為、それと流動性のある物質感という共通点に注目して制作をしてきた。何かを食べて、何かを消化させ、何かになれるのか。どのような動きが、どのように吸収され、どのような形で残るのか。
　これを集約的に画幅に移そうとすることが私の制作の目的になるだろう。私の制作の上に盛り込んでいるドロ ドロな何かの動きに見る人々の心も一緒に動いてほしい。その感覚が消化され吸収され彼らの小宇宙を成す源の 一つになることができたら幸いと思うのである。